

大人ではどのような人が独り言をよくいうのか？

筑波大学大学院(博)心理学研究科 岩男 征樹

筑波大学心理学系 堀 洋道

What adults do engage in monologue?

Seiki Iwao and Hiromichi Hori (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purpose of this study is to examine the function of adults' monologue in daily life. We use "the speech tendency scale" (Iwao and Hori, 1996) in two study. In the first study, it is found that "the private speech tendency scale" is constructed by two factors: "the monologue tendency" and "the inner speech thinking ability". The results indicate that the inner speech thinking ability positively correlates with "thinking in solitude", and negatively correlates with "talking own problems to others". However, the monologue tendency does not correlate with such scales, though it is mainly constructed with items about problem solving or verbal thinking. On the other hand, it correlates with depression and "affect expression in conversation". To confirm relationships between the monologue tendency and intellectual variables, a second study is conducted. Positive relationship is found between the inner speech thinking ability and "the intellectual memory", but the monologue tendency does not correlate with such intellectual variables. The findings indicate that the function of adults' monologue is not the same as children's private speech such as Vygotsky (1934/1962) examined.

Key words: private speech, adults, Vygotsky, speech tendency scale.

問 題

心理学における独り言の研究は、1930年代におけるピアジェとヴィゴツキーの自己中心的言語に関する論争に始まる。

ピアジェはまず、子どもが会話をしながらもコミュニケーション目的ではない発話を行っていることに注目した。彼は、それを自閉的思考から現実的論理的思考へと発達する移行段階の自己中心的思考の発露として生じるものと考え、自己中心的言語と呼んだ。ピアジェの考え方によると、自己中心的言語は、自己中心的思考に単に付随する伴奏のようなものであり、自己中心的思考の衰退、思考の社会化とともに、やがては消えゆく運命にある。それ故、ピアジェにとって自己中心的言語とは、発達に関し

て積極的な意味を持つものではない。

これに対して、ヴィゴツキーは、自己中心的言語を次のように捉えた。本来別の発生的源泉を持つ思考と発話は、人間においては発達のある時期に言語的思考として結実する。その結果が、3歳頃から発生する自己中心的言語である。自己中心的言語は、社会的発話から機能が分化する形で発生したものであり、発話を問題解決や思考の道具として用いるもの、つまり自己調整やプランニングといった知的機能を持つものである (Vygotsky, 1930/1978)。しかも、それは、やがては音声は抜け落ち、内言へと移行していく。そうして内面化された後も、意識において重要な役割を果たすことになる。このように、ピアジェとは反対に、ヴィゴツキーにとって自己中心的言語とは、発達において極めて積極的かつ重要

な意味を持つものとなる(ヴィゴツキー, 1934/1962).

これらの点に関して, ヴィゴツキー自身も実験的検討を行っている(ヴィゴツキー, 1934/1962). しかし, 本格的な実証的検討がなされるようになったのは, 欧米において1960年代以降になってからであった. その結果, 現在では, 多くの研究成果により, 一貫してヴィゴツキー理論の妥当性が示されている(Kohlberg, et al., 1968; Berk & Garvin, 1984; Frauenglass & Diaz, 1985; Berk, 1986, 1992ほか). このことを踏まえて, 後の研究者たちは, ピアジェの概念と区別するために, 自己中心的言語のことを“私的発話(private speech)”と呼んでいる(Wertsch, 1979; John-Steiner, 1992).

以上のことをまとめると, 独り言研究におけるヴィゴツキーの貢献は, 次の2点にあるといえる. 第1は, ピアジェが社会化にとって独り言は不必要なものであり, 発達とともに消えゆく消極的な意味を持つものと捉えていたのに対して, 彼は反対に人間の心の発達にとって極めて重要な積極的な意味を持つものとして捉えなおした点である(ヴィゴツキー, 1934/1962). この点は, 心の発達における発話の役割の重要性を強調するものであり, 理論的にはサイコロジカル・システムとしての心の発達という考え方に結実している(Iwao, 1996). もう1つは, 私的発話とは, 社会的発話から機能が分化し, やがては音声は抜け落ちて内言へと移行していく途中段階のものであり, その機能とは, 具体的には自己調整, プランニングである, という, “発話の知的機能の発生とその内面化”のプロセスを指摘した点である. この点についても, 理論的には次のような考え方に結実している. すなわち, ピアジェが個人的なものから社会的なものへという図式を考えていたのに対して, ヴィゴツキーは, 社会的なものから個人的なものへ, 精神間機能から精神内機能へという図式を考えており, いわゆる“文化的発達の一般的発生法則”(ヴィゴツキー, 1930-31/1970)として一般化されている(岩男, 1994, 1996).

ところで, 従来の私的発話の研究では, 特に後者の発話の知的機能及び内面化のプロセスの強調こそが, 主要な力点となっている. しかも, この点についての検討は, ヴィゴツキーがそうしたように, 子どもの発達において典型的に明らかにされることから, これまでの私的発話の研究の多くは, 必然的に対象が子どもであった(John-Steiner, 1992).

しかしながら, ヴィゴツキーによる私的発話の捉え方の重要な点は, 上述のように, 独り言が消えゆく不必要なものなのではなく, つまり独り言の形態

をとる発話が心の発達と関係ないということではなく, 反対に発話が心の発達にとって極めて重要なこと, しかもその発話と心の関係が内面化された後も, 内言としてずっと存続することを指摘した点にもある. それ故, John-Steiner (1992)が主張しているように, 生涯発達の観点からしても, それらの関係は重要であること, 子ども以後の発達においても, 独り言という形での発話が心あるいは意識と深い関わりを持っていること, したがって独り言は, その後の発達段階においても重要な研究対象となるということを考える必要がある.

しかしながら, これまで大人の独り言についての検討はほとんどなされてこなかった. そのため, 日常場面では大人の独り言にはどのような種類があるのか, それらが具体的にどのような機能を持っているのか, あるいはどのような時に独り言が多くなるのかについてさえ, まだ実証的には明らかにされていない. 以上の点から, 本研究では, 大人(今回は青年)を対象とした独り言の研究を行うことにする.

では, なぜ, 大人の独り言の研究は, 子どもの独り言の研究に比べてこれまであまりなされてこなかったのだろうか. それには, 大きく2つの理由があげられる.

第1の理由は, 上で述べた理論的な関心に伴う研究対象の限定である. ヴィゴツキーが, 小学校に入るまでに, 私的発話は減少し, 内言へと移行すると指摘したことから, 欧米の私的発話の研究は, ほとんどが子どもを対象とした検討を行ってきた. さらに, 大人を対象とした研究としては, 私的発話ではなく内言の研究のほうが, 特にロシアにおいて盛んである(瓜生, 1980; 天野, 1981; 坂野・天野, 1982). もちろん, これらの検討は, “社会的発話から私的発話, そして内言”というヴィゴツキーが指摘した典型的な発達の流れに対応した研究であり, それ自体は意義のあるものである. しかし, 小学校に入ってから私的発話は生じること, それにも機能的な役割があることは実証的に示されており(Berk, 1986), さらに, 日常経験的にも, 大人でも独り言をいうことは明らかである. もし, ヴィゴツキーが批判したピアジェのように, 独り言は消えゆくのものであり, 心の発達に何の関連もないと考えるならばともかく, 重要なものであると考えるならば, 小学校以降の精神発達や人格形成において, 独り言がどのような役割を持っているのかを明らかにすることは, 新たな理論的関心として注目に値するといえるだろう. 実際, ヴィゴツキーは, 大人でも独り言はいうこと, しかもそれは子どもよりも

複雑であることを指摘している(ヴィゴツキー, 1934/1962). それ故, 上述の理論的な制限による問題は, 大人の独り言研究を阻む本質的な原因ではない. 反対に, ヴィゴツキー理論からも, 大人の独り言を研究することは極めて意義があるといえる.

むしろ, 次の理由こそが, 事実上の理由といえるだろう. すなわち, 大人の独り言の研究を阻んできた最大の理由は, 実際に検討しようとする際につきまとう, 方法論的な困難さである. 子どもとは異なり, 大人を対象にして独り言の研究を行おうとすると, 次のような問題に直面する. そもそも独り言研究の始まりであるピアジェの観点では, 他者がいるにも関わらず, コミュニケーション目的でない発話を子どもがしていることが問題であった. しかし, 大人では反対に, 他者が存在する時には独り言はいうべきではないという暗黙理の規範があるために(John-Steiner, 1992), 他者の前で独り言はいわれることは極めて少なく, 経験的にも実際に目の前で他者の独り言を観察することは少ない. もし, 日常でそのような光景を観察した際には, 異様な感さえわいてくるものである. むしろ, 大人では, 1人で自分の部屋にいるような時に, 典型的に独り言は生じる(Kohlberg, et al., 1968; John-Steiner, 1992). そうならば, 方法としては, 部屋にビデオやカセットレコーダーを持ち込んで観察すればよい, と考えるだろう. しかし, 仮に1人で自分の部屋にいるような時に, ビデオを持ち込んで観察を行うとしても, 発話者の自発性が損なわれてしまうことが十分考えられる. 特に, 他者に聞かれては困るような内容の独り言は, 極めて生じにくくなるだろう. それでは, 子どもを対象とした多くの研究と同じように, 実験室で, ある課題を与えて, 課題遂行中の独り言を観察すればよい, ということになる. しかし, この方法にしても, あくまでそこで得られた発話は課題特殊なものにとどまり, 日常場面で生じる種類を捉えきれない可能性がある.

いずれにせよ, これまでの大人の独り言に関する研究は, 数自体も少ないのであるが, 実験室で特定の課題を用いるか, 仮に日常の発話を検討するにしても, 場面を限定し, なおかつ事例数も少ないエスノグラフィックな研究しかなされてきていない(John-Steiner, 1992). それは, やはり方法論的困難さが原因になっているといえる. しかし, 今後はより日常で生じる独り言全般を明らかにしていくことが必要である. その上で, ヴィゴツキーが子どもの発達を中心にして指摘した種類の独り言の役割や意義をあらためて押さえ, 意識との関連を検討していくことが重要であろう. なぜなら, ヴィゴツキー自

身も指摘しているように, 大人の独り言はより複雑であること(ヴィゴツキー, 1934/1962), 子どもとは異なる心のシステム(Iwao, 1996)において生じるものであること, Fry(1992)も自己調整だけではない, 意識に関連した私的発話の機能を示唆していること, などを考慮するならば, 単純に大人の独り言を子どものそれと同一視することはできないからである. つまり, まず検討すべきことは, 日常生活で生じる大人の独り言にはどのようなものがあるのかという点であり, 次に子どもの独り言との相違は何かという点を明らかにしていくことである. このような観点から, 日常で生じる独り言を全般的に捉えようとする検討として, 岩男(1993, 1997)の研究があげられるが, それ以外にはまだ少ない.

さらに, 方法論的な困難さを助長する形で大人の独り言の研究を困難にしている, もう1つの問題がある. それは, 大人では皆が同じように独り言をいうわけではないという, 発話の個人差に関する問題である(岩男, 1995). すでに述べたように, 大人には人前では独り言をいうべきではないという規範があるために, あるいは独り言をいうと変な風に思われてしまうという観念があるために, 基本的にはあまり人前で独り言をいうことはない. それ故, 仮に, 一般的に独り言が生じやすい問題解決場面を実験的に設定して検討しようとしても, 被験者はその状況に十分慣れないと, たとえ日常で独り言をいいがちな人でもなかなかいいにくかったりする. このこと自体も問題なのであるが, さらに個人差の問題が浮き彫りとなるのは, 被験者が十分に実験状況に慣れて, あたかも自分の部屋にいるような状況が作り出せた場合でも, 実際には声を出しやすい人もいれば, そうでない人もいるという点である. つまり, データを収集しようとしても, 全ての人から十分な発話を得られなかったり, 個人差が大きくて整理がつかなかったりするのである. そこで, 多少強制的に, 全員がある程度発話するような課題や条件を作ったとしよう. そうすると, 今度は新たに, 日常でその人がそのような発話をいうのかという, 自発性の問題が生じてくる.

実は, この発話の個人差という問題は, これまでも子どもを対象とした研究で指摘されてきている(Frauenglass & Diaz, 1985; Diaz, 1986; 藤岡, 1995). この問題は, データ収集の際と, さらに統計的検定をかけようとする際に典型的に現れる. すなわち, 発話数が少なく, 量的分析に耐えられない(藤岡, 1995), さらにデータを収集できたとしても, 個人差のために分散が大きくなり, 平均値だけを見るとかなりの差があるにもかかわらず, 統計

的には有意差が出にくくなる(Frauenglass & Diaz, 1985), という点である。このことは, 大人を対象とした場合にも, 同様かそれ以上に大きな意味を持つ問題として考慮する必要があるといえるだろう。特に, 日常生活の中での独り言を明らかにしようという視点を持つならば, その人の生活の仕方, 活動の仕方, パーソナリティの違いなどにも関連して, 発話の個人差はより大きくなることが考えられるからである。

本研究では, 特に, この発話の個人差に注目して, 検討を行っていくことにする。それは, 一般的な独り言研究で一般的な知見を提出していく際に, あらかじめ押さえておいたほうがよい点であると考えられるからである。一般的な検討も, 個人差があることを前提として進めていく必要がある。

では, このような発話の個人差は, いかにして検討すればよいのであろうか。実際の発話を検討しようとなると, 実験室で, ある課題を与えて, そこで生起する発話を観察することになる。しかし, この場合は, 課題特殊的な内容に限定してしまう可能性がある。そうすると, 今度はある特定の人物に常に付き添い, 観察し続けなければならないのだろうか。これでは, 観察者がいる時に生じたものを, 1人である時の独り言と同じものと考えてよいのかという本質的な問題が生じる。あるいは, 複数の被験者に常にカセットテープを携帯してもらって, 発話の個人差と生活における活動の関連を検討するといった方法をとればよいのだろうか。これも現実的にかなり実施が困難である。とりもなおさず, ある程度の個人差をカバーできるような多量のデータを収集しようとなると, 被験者の参加, 機材の準備の点から, かなり困難が生じる。

そこで, 本研究では, 決して完全なる方法ではないが, どのような人が独り言をよくいうのかという観点から, 調査法による検討をまず行うことにした。調査法にも, それが自己報告であるために, 現実の発話を測定していないという点で問題がある。しかし, 上述の議論のように, 本研究では, 日常の中で生じる大人の独り言を検討したいという観点を持っている。尺度で測定する個人の傾向性が, 日常での活動を反映したものであると考えるならば, 上で述べたような他の方法よりも, 現時点では一石の長がある。また, 今後上述の別の方法を行うにしても, 前もってある程度の様子を予測する際の子備的な資料にはなる。以上の点を重視して, 今後の実証的, 理論的研究の基礎資料を得るために子備的かつ探索的検討を行う, という位置づけで, 今回は調査法による検討を試みることにした。

また, 本研究では, 上述の議論を踏まえ, 大人の独り言を私的発話と同義に呼ぶことに対しては保留する。ヴィゴツキーの概念を反映するものとして用いられるようになった“私的発話”という用語を, 子どもの発話との同一性が保証できない現在, 安易に用いることを避けるためである。また, そうするのは, 大人ではヴィゴツキーが考えていた以外の独り言, あるいは子どもの私的発話以外の独り言で, かつ理論的にも重要な種類のものがあるかもしれないという期待があるためでもある。ただし, この点についての詳細な検討は, 今回の調査では限界があるので, 今後の研究に委ねたい。

調査 1

1 目的

大人では, どのような人が独り言をよくいうのであろうか。この点を検討するにあたり, まず先行研究の知見や指摘をもとに, 以下の2点を予測した。第1に, 従来の子どもの対象とした研究では, ヴィゴツキーが指摘するように, 困難な問題解決場面で, 発話量が多くなることが明らかにされている(Berk, 1992; Frauenglass & Diaz, 1985; 宮本・国枝・山梨・東, 1965)。このことから, 日常で問題を抱えることが多い人ほど, 独り言をよくいうことが考えられる。第2に, 大人では1人である時に生じやすい(Kohlberg, et al., 1968; John-Steiner, 1992), という点から, 日常で他人と会うことが少ない, 部屋にこもることが多いなどのように, 1人であることが多い人ほど, 独り言をよくいう可能性が高くなるだろう。

以上の点を踏まえて, まず従来尺度から関連しそうなものを選んだ。①プライバシー志向性尺度(岩田, 1987), 1人である傾向性の高さを測定しているとも考えられる。それ故, プライバシー志向性の高い人は, 独り言をいいがちであると思われる。②神経質尺度。些細なことが気になって考えてしまう人は独り言をいいやすいのではないだろうか。③持久性尺度。何でもやり続けることは, 1人で行う問題解決にも必要であると思われる。そうならば, そのような人は独り言が多くなるのではないだろうか。④進取性尺度。クリエイティビティが高い人ほど, 日常ではよく考える機会が多いのではないだろうか。それ故, 創造的な人は, 独り言をいう機会が多くなると考えられる。⑤抑うつ性尺度。何でも深く思い詰めてしまう人は, 独り言をいいやすいのではないか。この点については, Fry (1992)により, 抑うつ的な高齢者ほど, ある種の私

的発話に従事することが指摘されている。青年においても、同様なのではないだろうか。⑥非協調性尺度。高齢者では社会的コミュニケーションに従事しない人は、個人的なコミュニケーションに従事しやすくなるという指摘がある(Fry, 1992)。青年でも、他者との協調性が低い人は、自ずと1人であることが多くなるのではないだろうか。以上の②～⑥は、新性格検査(柳井・柏木・国生, 1987)から本研究に関連があるものとして選んだものであり、いずれも10項目からなる新性格検査の下位尺度である。また、上述の予測は、あくまでも尺度選択の目安であって、積極的な仮説ではない。調査の目的は、探索的な検討である。

一方で、青年心理学の領域で、久世らの一連の“困った場面”についての研究がある(久世・続・蔭山ほか, 1972a, 1972b; 久世・蔭山, 1973; 久世・蔭山ほか, 1973)。これらの研究は、本来“自己開放性”についての検討である。しかし、青年が日常でどのようなものを困った場面と考えているかについて、つまり日常ではどのようなものが問題であるのかについての参考にはなる。それ故、本研究では、日常の困った場面で1人で考えること、すなわち学校の教科書に出てくるような問題ではない、日常での問題解決が、独り言をいいやすいことと果たして関係があるのかどうかについて検討するために、久世らの困った場面を、予備調査で選択した上で用いることにした。

また、発話の個人差を測定するには、岩男・堀(1996)の発話傾向尺度を用いた。この尺度は、信頼性は高いものの、まだ完全には妥当性が保証されているものではない。しかし、今後の基礎資料を得るための探索的検討という目的には十分であると考え、本研究では採用することにした。

2 予備調査

久世らの研究は、1970年代に行われたものである。それ故、そこで用いられた“困った場面”が今でも適用するかどうか、現在の青年がそれらの場面を当時と同様に困った場面と認識しているかどうかの保証がない。そのため、現在の青年が困った場面と認識している項目を選択するために、以下のような予備調査を行った。

久世らの研究で用いられた21場面のそれぞれについて、①自分でどれくらい困ったと感じるか、②そのような問題に直面しているならば、どれくらい自分1人で考えるか、の2点について、1を“ない”、5を“ある”とした5件法で評定させた。また、21場面の中で、今の自分にはない、起こらない

というものを選択させ、○を付けてもらった。さらに、①困ったことを1人で考えることがあれば、それはどのような内容か、②困ったこと以外で1人で考えることがあればどのような時か、について自由記述させた。

10人のデータから、困ったと感じる程度と1人で考える程度については平均値を、今の私にはないという選択については人数を算出し、平均値については値の高い順に、人数については数の少ない順に場面を並べ替えた。まず、1人で考える程度に注目して、その平均値の上位から選ぶことにした。同時に、今の私にはないという選択数が少ない場面と、困ったと感じる程度の平均値の上位のものを選ぶようにし、最終的にいずれの基準も満たすような9場面を選定した。一方で、自由記述については、その9場面と内容がだぶらないもので、比較的多くみられ、一般的な表現としてまとめられるものを選び、新たに4場面を付け加えることにした。その4場面とは、“何かの失敗について考えるとき”、“物事がうまくいかなくて問題解決の手順を考えるとき”、“人付き合いの難しさで悩むとき”、“お金がないことで悩むとき”である。以上のように、最終的には、困った場面として13場面が選ばれた(Table 1)。

3 方法

(1) 調査対象者

大学生187名(男性88名、女性99名)。ただし、記入漏れのあったデータは削除したため、分析対象は、164名(男性70名、女性94名)であった。

(2) 質問紙及び質問項目

質問紙は、性別や年齢などを尋ねる質問に続いて、以下の質問項目によって構成されていた。①発話傾向尺度(岩男・堀, 1996)、21項目。社会的発話

Table 1 調査1で用いた“困った場面”項目

1	両親が無理解なとき
2	身体的な面や容姿について気になるとき
3	自分の性格について気になるとき
4	信頼する友だちが得られないとき
5	友だちといざかい(けんか・口論)をしたとき
6	異性との交際について不安のあるとき
7	学校生活に、張り合いがないとき
8	どの職業を選択しようか迷ったとき
9	人生いかに生きべきかよくわからないとき
10	何かの失敗の原因を考えるとき
11	物事がうまくいかなくて、問題解決の手順を考えるとき
12	人付き合いの難しさで悩むとき
13	お金がないことで悩むとき

傾向尺度9項目と私的発話傾向尺度12項目の2つの下位尺度からなる。②プライバシー志向性尺度(岩田, 1987), 13項目。③神経質尺度, ④持久性尺度, ⑤進取性尺度, ⑥抑うつ性尺度, ⑦非協調性尺度, の新性格検査(柳井・柏木・国生, 1987)から選ばれた下位尺度, 各10項目。以上の①~⑦は, いずれも1を“あてはまらない”, 5を“あてはまる”とする5件法で回答させた。次に, 予備調査で選ばれた場面をもとに作成された, 次の2種類の質問が含まれていた。⑧困った場面でどれくらい1人で考えるか, の13項目(13場面)。例えば, “両親が無理解なとき”について, 1を“1人で考えない”, 5を“1人で考える”とした5件法で回答させた。⑨困った場面でどれくらい人に相談するか, の13項目。⑩と同じ13場面のそれぞれについて, 1を“人に相談しない”, 5を“人に相談する”とした5件法で回答させた。最後に, ⑩1人でいがちな程度を測定するために独自に作成された, “1人でいることが多い”, “いつも一緒にいるような友だちは少ないほうだと思う”, “食事は自分1人でとることが多い”, の3項目と, ⑪日常で問題解決に従事しがちであるかどうかを直接に尋ねる, “1人でやらなければならないことが多い”, の1項目。いずれも, 1を“あてはまらない”, 5を“あてはまる”とする5件法で回答させた。

(3) 手続き

集団形式による質問紙調査。授業中に質問紙を配布し, その場で回答してもらった。

4 結果と考察

(1) 発話傾向尺度の分析

岩男(1995), 岩男・堀(1996)の研究から, 社会的発話傾向尺度と私的発話傾向尺度は, 内容的に独立のものであることが示されている。それらの結果をもとに, 次のような分析を行った。2つの尺度は,

いずれも, それだけでも信頼性が高い, 1つの概念を測定している項目群である。しかし, ここではさらに詳細な検討に訴えるために, 各尺度を構成している項目群に対して, それぞれ因子分析を行った。ただし, 発話傾向に関する全ての項目は, 音声化する傾向が高いほど, すなわち発話傾向が高いほど, 得点が高くなるようにしてある。

社会的発話傾向尺度9項目に対して因子分析(主成分分解, ヴァリマックス回転)を行ったところ, 固有値1以上の基準で2因子が抽出された(Table 2)。第I因子には, “会話では相手の話を聞いていることのほうが多い”, “人と話す時, 黙りがちになる”, “会話では話していることのほうが多い”などの項目の因子負荷量が高く, 会話で一般的によくしゃべりがちな傾向性を示していると考えられる。それ故, この因子を“一般的社会的発話傾向”因子と解釈した。第II因子には, “会話の中で感情をすぐ口に出すほうである”, “「静かにしろ」と言われることがある”の2項目の因子負荷量が高く, 会話で特に感情を口に出しがちな傾向性を示していると考えられる。それ故, この因子を“感情的社会的発話傾向”因子と解釈した。さらに, 信頼性を検討するために, それぞれ7項目, 2項目で α 係数を算出したところ, .87, .60となった。項目数が少ない割にはいずれも十分な信頼性があると判断し, 合成得点で各尺度を構成することにした。

同様に, 私的発話傾向尺度12項目に対して因子分析(主成分分解, ヴァリマックス回転)を行ったところ, 固有値1以上の基準で2因子が抽出された(Table 3)。第I因子には, “よく独り言を言っている”, “独り言をつい人に聞こえるくらいの声で言ってしまう”などの項目の因子負荷量が高く, 同時に, 思考のための発話することを意味する項目(No.19, 2, 9)と, 感情を口にすることを意味する項目(No.21)が負荷していた。このことから, こ

Table 2 社会的発話傾向9項目に対する因子分析の結果

項 目	第 I 因子	第 II 因子	共通性
10 会話では相手の話を聞いていることのほうが多い(逆転項目)	.82	.13	.68
12 人と話す時, 黙りがちになる(逆転項目)	.81	.13	.67
17 会話では話していることのほうが多い	.77	.18	.63
15 「おとなしいね」と人に言われる(逆転項目)	.77	.14	.61
4 「よくしゃべるね」と人に言われる	.67	.41	.62
11 人と話をする時には, しゃべらずにはいられない	.66	.26	.50
1 人と話をしている, 思いついたことはすぐ口にするほうである	.51	.46	.48
18 会話の中で感情をすぐ口に出すほうである	.11	.87	.76
8 「静かにしろ」と言われることがある	.18	.76	.60
	寄与率 49.1%	12.5%	

Table 3 私的発話傾向12項目に対する因子分析の結果

項 目	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	共通性
13 よく独り言を言っている	.82	.22	.65
7 独り言をついに聞こえるくらいで言ってしまう	.76	.02	.44
6 1人である時、思いついたことを口にしていることが多い	.76	.38	.66
19 1人でしゃべりながら考えていることが多い	.75	.22	.71
2 何かについて解決法を1人で考える時に、声に出していることがよくある	.69	.42	.58
3 1人で部屋にいる時は、あまり声を出さないほうである(逆転項目)	.63	.21	.47
21 1人である時、感情を口にすることが多い	.62	.29	.71
9 1人で勉強している時、考えていることをよく声に出している	.58	.37	.63
20 口に出して考えるより、頭の中で考えるほうが楽である(逆転項目)	.05	.81	.57
5 声に出さずに、考えをまとめることができる(逆転項目)	.27	.77	.61
14 声を出さずに黙ったままで考えていると、うまく頭の整理ができない	.37	.71	.66
16 何かを考える時に、声を出すということはほとんどない(逆転項目)	.53	.54	.47
	寄与率	50.1%	9.8%

の因子は、思考のための私的発話だけというよりは、それを中心としながらも、感情も発話するというような、いわば独り言を一般的にいいがちな傾向性を意味していると考えられる。それ故、この因子を“独り言傾向”因子と解釈した。第Ⅱ因子には、“口に出して考えるより、頭の中で考えるほうが楽である”、“声に出さずに、考えをまとめることができる”などの項目の因子負荷量が高く、声に出さずに思考できる能力を示していると考えられる。それ故、この因子を“内面化能力”因子と解釈した。さらに、信頼性を検討するために、それぞれ8項目、4項目でα係数を算出したところ、.89、.79となった。いずれも十分信頼性が高いと判断し、合成得点で各尺度を構成するようにした。ただし、上述のように、全ての項目は発話傾向が高いほど得点が高くなるようにしている。したがって、内面化能力尺度は、得点が低いほど内面化して思考ができることを意味することになる。

本来、概念的には、独り言の下位概念として私的発話が想定できる。しかし、今回の結果では、私的発話傾向尺度の下位尺度として、独り言傾向尺度が構成されることとなった。しかし、この結果をもって、私的発話の下位概念として独り言を考えるべきである、とすべきではないだろう。むしろ、私的発話傾向尺度は、作成の段階で、独り言を測定する項目群(第Ⅰ因子)と、私的発話の特徴である内面化に関する項目群(第Ⅱ因子)から構成されていたため、それらを全体としてみた場合に、より私的発話としての意味合いが強くなっていったもの(私的発話傾向尺度)、と考えるほうがよいだろう。そもそも私的発話も独り言である。独り言でしかも内面化能力を伴うとなれば、それは概念的に私的発話を指すこと

になる。それ故、今回の結果は、通常の因子分析の結果の解釈のように、私的発話の構造を示すものでもないし、私的発話が独り言と内面化能力の2つからなる、あるいはそれら2つだけからなるということを示すものでもない。

(2) その他の尺度の分析

プライバシー志向性尺度13項目、新性格検査の中の5尺度50項目、困った場面で1人で考える程度13項目、困った場面で人に相談する程度13項目、1人でいがちな程度と問題解決に従事する程度4項目の5つの項目群に対して、個別に因子分析を行った。

新性格検査はスクリー法、それ以外の項目群は固有値1以上の基準で因子を抽出し、各因子に負荷量の高かった項目(.40以上)で合計得点を算出することで、尺度化を行った。各尺度のα係数は、Table 4の通りである。いずれも十分な信頼性を示した。なお、プライバシー志向性尺度、困った場面で1人で考える程度項目、相談しがちな程度項目に関しては、α係数が高かったこともあり、全項目を合計して、1因子としての尺度化も行っている。

新性格検査は、今回のデータでは、当初の5因子(尺度)ではなく、4因子が抽出された。これは、神経質尺度と抑うつ尺度の両方が、同じ第Ⅰ因子に負荷したためである。ここでは、この結果をもとに尺度化を行った。この第Ⅰ因子の“落ち込み傾向”尺度は、神経質尺度の“心配事があって夜眠れないことがある”以外の、2尺度の残り19項目で構成されている。

(3) 発話傾向尺度とその他の尺度との相関

発話傾向に関する4つの尺度と、他の尺度との相関をTable 4に示した。また、相関があった変数だけを抜き出して、図で示したものが、Fig. 1であ

Table 4 発話傾向尺度と他の尺度との相関(調査1)

尺度名	α係数	一般的社会的	感情的社会的	独り言傾向	内面化能力
一般的社会的発話	.87	1.00			
感情的社会的発話	.60	.46**	1.00		
独り言傾向	.89	.05	.20*	1.00	
内面化能力	.79	.12	.14	.67**	1.00
プライバシー志向性	.80	-.03	.05	.01	-.09
F1 独居志向	.75	-.01	.01	-.04	-.12
F2 劣等感に関わる情報の隠蔽志向	.73	-.09	.01	.06	.04
F3 自由意志行動志向	.63	.12	.12	.02	-.11
F4 私生活に関する情報の隠蔽志向	.61	-.12	.02	-.00	-.03
落ち込み傾向	.90	-.33**	-.09	.17*	.10
創造意欲	.89	.01	-.08	.06	-.09
粘り強さ	.85	.11	-.11	-.08	-.04
自分勝手	.74	-.11	.02	.03	.08
1人で考える程度	.86	-.23**	-.18*	-.00	-.16*
F1 対人関係の問題	.75	-.21**	-.19*	.02	-.15
F2 自己概念の不安定	.74	-.22**	-.11	.01	-.11
F3 人生や生活の悩み	.74	-.15*	-.13	-.03	-.14
人に相談する程度	.83	.31**	.20**	.03	.16*
F1 自己概念の不安定	.79	.27**	.15	.05	.14
F2 人生や対人関係の悩み	.75	.28**	.18*	-.00	.10
F3 失敗に対する問題解決	.79	.14	.13	.05	.15
F4 お金の悩み(1項目)		.02	-.03	-.05	.01
1人でいがち	.70	-.30**	-.15	.02	-.13

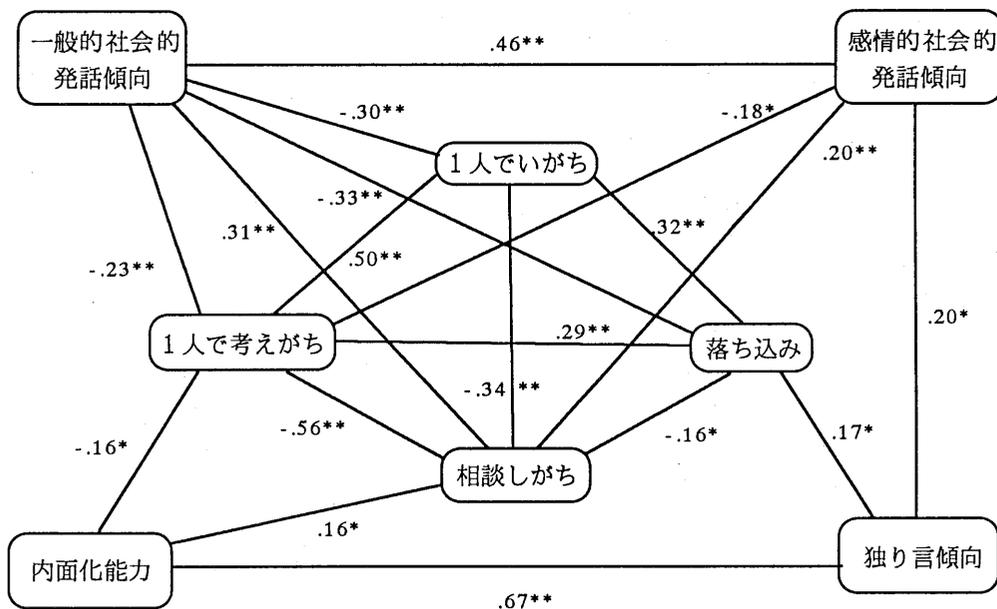


Fig. 1 相関があった変数の関連(調査1)

る。Fig. 1を見ると、発話傾向以外の4つの変数は、いずれも納得のいく関連を示している。

Fig. 1より、会話で一般的によくしゃべりがちな人は、そこで感情を口にする傾向も高く、落ち込みがちではない。そのような人は、1人でいることが少ないためか、困ったことを人に相談しがちであり、反対に1人で考える傾向はやや低い。このことから、一般的社会的発話傾向の高い人は、対人関係をうまく使って、問題解決や精神的健康を保っていることがわかる。また、感情的社会的発話傾向が高い人は、会話ではよくしゃべり、困ったことを人に相談しがちな傾向がややあり、反対に1人で考える傾向は少ない。また、若干独り言をいいがちでもある。しかし、落ち込み傾向とは関連がなかった。常識では、会話で感情表出することがカタルシスになると考えられるが、今回の結果では、落ち込む傾向があるからといって、会話で感情を口にしていくわけではなかった。むしろ、落ち込まないことは、会話でよくしゃべり、1人でいることを少なくして、1人で悩まないようにすることに関連していた。このことは、感情を口にしようとしまいと関わらず、問題解決に関わる話を人に相談することのほうが、落ち込みを少なくすることを示唆している。要するに、愚痴をこぼすよりも、どうするかのほうが重要なのであろう。

一方で、私的発話傾向の2変数と他の変数との相関は、全体的に弱い相関ではあるものの、実に興味深い結果を示している。それ故、今後の検討のためにも、少し議論を広げてみたい。

上述のように、内面化能力は、得点が低いほどその能力が高いことを意味している。負の相関を持つ変数との間に、正の関連があることになる。Fig. 1より、内面化能力が高い人は、発話を内面化できるために、独り言をいうことが少ない。また、そのような人は、困ったことがあっても、人に相談することは少なく、反対に1人で考えがちである。つまり、普段から発話による問題解決を1で行う傾向が高い人ほど、声に出さなくても考えることができるということを示している。このことは、ヴィゴツキー(1934/1962)が、発達において、私的発話が内面化される際に音声は抜け落ちるのは、本来コミュニケーション目的である音声を自分に向けてようになったことで、それが重要ではなくなったからであるという指摘に符合しており、子どもの独り言と同様、ヴィゴツキー理論の適用の可能性を示唆するものである。

ただし、この結果から、大人における個人差が、社会的発話から内言へ至るまでの言語発達のある段

階を示しており、この個人差を見れば、その人の言語発達の段階が把握できるというようには捉えないほうがよいだろう。むしろ、普段の日常の活動のあり方、特に問題解決における他者との関わり方や発話の用い方を反映したものと考えるべきである。それ故、大人では、活動のあり方によっては、この傾向性は変化しうる。この点で、発達の移行段階にある子どもの場合とは、同じ独り言でも異なっていると見るべきではないだろうか。もし、このように、大人では日常の活動によって、問題解決のための発話の内面化が左右されているのであるならば、今回の結果は、ヴィゴツキー理論だけでなく、活動理論(レオンチェフ、1975/1980)も含めて独り言の研究を進めていく必要があることを示唆している。

一方、独り言傾向は、特に注目すべき結果を示している。もともと同じ私的発話傾向尺度であるので、それが、内面化能力の低さと関連があるのは当然理解できる。しかし、上で見たように、独り言傾向とはいえども、負荷した項目を見ると、内容的には私的発話、つまり思考や問題解決のための発話が中心となっている。このことを考慮するならば、独り言傾向は、内面化能力と同様、1で行う問題解決あるいは思考そのもの、つまり1人でよく考えることと関連を持ってよいはずである。ところが、結果は、思考に関連する変数よりは、感情的社会的発話傾向と落ち込み傾向という、むしろ感情に関連する変数との間に関連があることを示唆している。これは、どのように解釈すればよいのだろうか。

1つの可能性は、独り言傾向尺度は8項目から構成されていたわけであるが、その中でも、特に感情表出を示す項目(No.21)が上の2変数との間に強い相関があったため、尺度全体としても弱い相関を持ってしまった、というものである。この考え方だと、感情に関する尺度との相関は、独り言傾向全体との真の関係を表したものではないということになる。

この点を明らかにするために、独り言傾向尺度を構成する8項目のそれぞれと落ち込み傾向尺度との相関を個別に検討した。その結果、予測通りに、“1人でいる時、感情を口にすることが多い”との間に.18($p < .05$)の正の相関があった。しかしながら、その他にも、“よく独り言を言っている”との間に.21($p < .01$)、“1人でしゃべりながら考えていることが多い”との間に.20($p < .01$)、“何かに困って解決法を1人で考える時に、声を出していることがよくある”との間に.18($p < .05$)の相関があった。同様に、独り言傾向尺度の各項目と感情的社会的発話傾向との相関を見たところ、“独り言を

ついに聞こえるくらいの声で言うてしまう”との間に.22($p < .01$), “1人でしゃべりながら考えていることが多い”との間に.20($p < .05$), “何かに困って解決法を1人で考える時に、声を出していることがよくある”との間に.17($p < .05$), “1人で部屋にいる時は、あまり声を出さないほうである”(逆転項目)との間に.15($p < .05$)の相関があった。つまり、落ち込み傾向及び感情的社会的発話傾向は、思考のための発話を示す項目との間にも関連を持っていたのである。したがって、Fig.1の結果は、感情に関する項目に引っ張られたというよりは、やはり独り言傾向全体の結果として見るべきである。

ということは、どういうことなのであろう。1つの可能性として、次のような解釈が成り立つのではないだろうか。すなわち、独り言傾向が高い人が行う発話は、確かに問題解決のための発話を中心でありながらも、実はそれ自体、感情表出の機能も担っているのかもしれない。例えば、恋に悩んでいる時に、友だちにどうすればいいかを相談し、問題解決のための発話をしているながらも、実はそのことよりは、むしろ感情のカタルシスが真の目的だったりする場合がある。これと似たようなことなのかもしれない。つまり、感情表出をもう1つの目的として問題解決の発話をする、あるいは発話そのものは問題解決であるが、活動全体は感情表出としての目的を担っている、ということである。

しかし、上で見たような他者に相談してコミュニケーションに訴える場合とは反対に、自分で悩み、解決しようとして独り言をいうことは、落ち込み傾向を解消することにはなっていない。また、感情的社会的発話傾向と落ち込み傾向には相関がないことから、一方でコミュニケーションに訴えて会話で感情を吐露しても、落ち込み傾向の増減には、やはり関係がないのである。このように、同じ問題解決でも、人に相談しがちなことは落ち込み傾向と負の相関があるのに、独り言として問題解決的発話をすることは落ち込み傾向と正の相関があるという正反対の結果が出たのは、興味深いことである。おそらく、たとえ人に頼らずに、独り言をいう中で自分で答えが見出せたとしても、やはり1人では精神的には不安定であり、その状態を抱えたままになっているためなのであろう。

以上のことから、独り言傾向が感情的な変数と関連を持つ可能性がありうることは理解できた。では、もう1つの問題、すなわち独り言傾向が、困った時に1人で考えることと関連を持たなかったという点についてはどうなのであろうか。もしかした

ら、この調査で測定した、困った場面で1人で考える程度とは、知的なものというよりは、日常的な問題解決、つまり対人関係のトラブルや自分についての悩みのようなものであったからかもしれない。そうだとすると、より知的な問題解決との間には関連を持つことも予想される。

そこで、調査2では、独り言傾向とより知的な問題解決や思考に関連のある認知的な個人特性との間に関連があるかどうかについて検討し、あらためてこの問題について考察を加えることにする。

調査 2

1 方法

(1)調査対象者

大学生164名(男性55名, 女性109名)。ただし、記入漏れのあったデータは削除したため、分析対象は154名(男性51名, 女性103名)であった。

(2)質問紙及び質問項目

質問紙は、性別や年齢などを尋ねる質問に続いて、以下の質問項目によって構成されていた。①発話傾向尺度。調査1と同様である。②認知的失敗質問紙(山田, 1990), 25項目。この尺度は、本をどこに置いたか忘れてしまった、運転していて標識を見落としてしまったなどのような行動の失敗の原因となる、状況や行動に対する注意や認知の不十分さ、すなわち“認知的失敗”を測定するものである。日常で認知的失敗あるいはそれが原因となる行動の失敗が多い人は、自ずとその失敗や問題に対する発話、それを解決するための発話が多くなるだろう。

③日常生活における記憶能力に関する自己評価(楠見, 1991), 30項目。“よく忘れ物をする”, “知人の名前が思い出せないことがある”のように、記憶能力の低い人は、必要なことを思い出そうとする時に、独り言が多くなるのではないだろうか。④曖昧さ耐性尺度(ATS-IV, 今川, 1981), 44項目。この尺度は、何かしようという時に明確なプランが立たない、目標を達成する見込みが立たない、などのような曖昧な状況で、その“曖昧さ”に耐えられるかどうか、認知的に耐性があるかどうかを測定するものである。曖昧さに対する耐性が低い人ほど、その曖昧な状況を何とか改善しようとするのが考えられる。そのような時に、自ずと独り言が多くなるのではないだろうか。以上のうち、①-③は5件法、④は7件法で評定させた。

(3)手続き

集団形式による質問紙調査。授業中に質問紙を配布し、その場で回答してもらった。

2 結果と考察

(1) 発話傾向尺度の分析

調査1と同様、まず発話傾向尺度については、社会的発話傾向尺度と私的発話傾向尺度に対して、個別に因子分析を行った。社会的発話傾向尺度9項目に対して因子分析(主成分分解)を行ったところ、固有値1以上の基準で1因子が抽出された。また、私的発話傾向尺度12項目に対して因子分析(主成分分解, ヴァリマックス回転)を行ったところ、固有値1以上の基準で2因子が得られたが、調査1では第II因子に負荷していた“何かを考えるときに声を出すということはほとんどない”という項目が第I因子に負荷した。

ここで、この結果をもとに尺度化することも考えられる。しかし、それでは調査1と比較することができない。それ故、とりあえず調査1と同じ項目で各尺度を構成し、 α 係数を算出してみた。その結果、一般的社会的発話傾向尺度が.88、感情的社会的発話傾向尺度が.53、独り言傾向尺度が.88、内面化能力尺度が.75となった。感情的社会的発話尺度は若干低いものの、いずれもほぼ検討には耐えうる信頼性があると考えられる。それ故、以下においては、調査1と同じ項目構成による尺度で分析を行うことにした。

(2) その他の尺度の分析

認知的失敗質問紙25項目、記憶能力の自己評価30項目、曖昧さ耐性尺度44項目の3つの尺度について、個別に因子分析(主成分分解, ヴァリマックス回転)を行った。その結果、いずれもスクリー法によって、それぞれ1因子、3因子、1因子が抽出された。

認知的失敗質問紙については、第I因子に.40以上の負荷を示した17項目で尺度を構成した。 α 係数は.84であり、十分な信頼性を示している。尺度を構成した項目には、“言おうとしていたことを思い出せない”、“家の中を歩いてきて、何をするためにそこに来たのか思い出せない”、“道路に出ている看板や標識に気がつかない”、“新聞や本どこに置いたか思い出せない”、“スーパーマーケットに行って、欲しい品物が目の前にあるのに見つけられない”、“何かをしている時に話しかけられると聞きのがす”、“例えば捨てようと思っていた包み紙を残して、チョコレートの方をうっかり捨ててしまう”などがある。このことより、この尺度は、物忘れや目標を見失う、気づかないなど、ぼんやりして当該の活動に注意散漫な傾向を示していると考えられる。

また、記憶能力の自己評価の第I因子には、“知

人の名前が思い出せない”、“待ち合わせの時間や場所を忘れる”、“調べた電話番号をかけるまでに忘れる”、“買う予定であった物が思い出せない”、“お金を何に使ったかを忘れる”、“よく忘れ物をする”など項目の負荷量が高く、日常生活全般における物忘れを意味しているものと思われる。それ故、“日常場面の記憶能力”因子と解釈した。第II因子には、“神経衰弱が得意”、“英語の文法や数学の公式をいつまでも覚えている”、“テストのとき、覚えたことが思い出せないで困ることがある”(逆転項目)、“先週の授業がどこまで進んだかを覚えている”などの項目が負荷し、“知的場面の記憶能力”因子と解釈した。第III因子には、“いやな思い出が忘れられない”、“初恋の人の顔を思い出することができる”、“身近な人の噂話をよく覚えている”などの項目が負荷し、“思い出の記憶能力”因子と解釈した。いずれも負荷量が高く、因子負荷が明瞭な項目を選んで、それぞれ11項目、6項目、5項目で尺度を構成した。 α 係数は、それぞれ.74、.56、.50である。

曖昧さ耐性尺度は、第I因子に.40以上の負荷を示した22項目で尺度化し、 α 係数は.85となった。

(3) 発話傾向尺度とその他の尺度との相関

発話傾向4尺度と他の尺度との相関をTable5に示した。調査1と同様、私的発話傾向2尺度と他の尺度との相関は、やや弱いものであった。しかし、その結果は興味深いものである。

まず独り言傾向は、認知的失敗と正の相関があった。すでに見たように、認知的失敗は、ぼんやりして当該の状況で行っている活動に対して注意散漫な傾向を示すものである。それ故、独り言も、そのような人に若干多いことを示唆している。つまり、独り言は、当該の状況で活動をしながらか、ぼんやりと他のことを考えている時に比較的生じやすいことを示唆している。この点については、日常経験的にも納得のいくことであろう。ただし、この認知的失敗は、問題解決や思考のような知的変数というよりは、認知に関する個人特性、あるいは性格に近いものを測定していると思われる。それ故、厳密には、独り言傾向は知的変数と関連があったとはいえない。

一方、内面化能力は、知的場面での記憶能力と正の相関があった。この結果は、内面化能力が高い人ほど、そのような場面での記憶能力が高いことを示唆している。逆にいうと、内面化能力が低い人は、知的場面での記憶が悪いことを意味している。ということは、内面化能力が低い人、つまり声に出さな

Table 5 発話傾向尺度と他の尺度との相関(調査2)

尺度名	α 係数	一般的社会的	感情的社会的	独り言傾向	内面化能力
一般的社会的発話	.88	1.00			
感情的社会的発話	.53	.57**	1.00		
独り言傾向	.88	.01	.13	1.00	
内面化能力	.75	.05	.12	.66**	1.00
認知的失敗	.84	.14	.38**	.19*	.13
記憶能力の自己評価					
F1 日常場面の記憶能力	.74	.01	.17*	.15	.12
F2 知的場面の記憶能力	.56	-.01	-.10	-.02	-.17*
F3 思い出の記憶能力	.50	.18*	.13	.03	-.06
曖昧さ耐性	.85	.23**	.15	.06	.03

いと考えがまとまらない人は、他人に相談することが多く、思考を社会的に分配し、他者を記憶の外部装置(リソース)として利用しているため、あまり自分では記憶しておかなくてもよいのかもしれない。いずれにせよ、内面化能力は、知的変数と関連を持ったといえる。

以上のように、調査1と同様、今回の結果でも、独り言傾向は知的な変数とはほとんど関連を持たなかった。これについては、次の全体的討論の中で、考察してみたいと思う。

全体的討論

なぜ独り言傾向は、内容的には問題解決的な発話を中心とするものであるにもかかわらず、問題解決的あるいは知的変数と関連を持たなかったのであろうか。これについては、以下の2つの考え方があげられる。

第1に、今回の2つの調査で取り上げた変数が、実際の私的発話の機能を反映するような問題解決を捉えているものではなかった、というものである。つまり、より適切な指標をそろえれば、それなりの相関が得られると考えられる。では、そのような問題解決とは、一体どのようなものなのであろうか。

ヴィゴツキーが考えていた問題解決とは、実際に状況中で行われる道具的行為、あるいは実践的活動としてのものであった。子どもが棚の中にあるキャンディーを棒を使って取り寄せる実験の例が有名である(Vygotsky, 1930/1978)。これに対して、調査1で取り上げた問題解決とは、いわゆる悩み、つまり状況において目に見えてなされる外的活動というよりは、心の中で言葉を使って考えるような内的活動であった。また、調査2における知的な変数

は、同様にヴィゴツキー的な問題解決活動というよりは、個人の認知的な特性であった。この点で、私的発話を中心とすると考えられる独り言傾向と、それらとの変数の間に相関が出なくても当然である、と考えることも可能である。

しかしながら、本研究では、もう1つの考え方、すなわち今回得られた結果は、実際の独り言の機能を反映しているもの、つまり結果が示すようなものである、という考え方を支持する。なぜならば、まず第1に、独り言傾向は知的な変数と関連を得られなかったが、内面化能力では予想するような関連が得られているからであり、第2に、理論的にいうならば、大人ではすでに発達的に内言を獲得していることが考えられるので、独り言の生起に関して、発達の過渡期にある子どもの私的発話と同一視することには疑問があるからである。それ故、独り言傾向尺度は、実際の大人の独り言を測定しうる指標であり、むしろ典型的な私的発話の機能を反映する指標は、独り言傾向尺度ではなくて、内面化能力尺度のほうであるということになる。

では、独り言傾向尺度が測定しているという、大人の独り言とは一体どのようなものなのであろうか。今回の結果から、日常でなされる大人の独り言は、当該の状況で行っている活動から離れて、心の中でぼんやり何かを考えている時に生じるものであり、内容的には問題解決的な発話をしていながらも、その機能は感情に関連するものが想定できる。そもそもヴィゴツキー的な私的発話は、当該の問題解決活動に対して、行為をすぐに変容するように、積極的に発話を思考の道具として用いるようなものである。これに対して、ここで捉えているのは、心の中で問題を思い出して、ぼんやりと考えるようなもの、つまりすぐにその場で問題を解決できるとい

うよりは、自然と考えてしまったというような、考えること自体に意味がある消極的な発話使用であると考えられる。ということは、典型的な大人の独り言とは、やはり問題解決そのものというよりはむしろ精神衛生に関係があるのではないだろうか。

だからといって、大人ではヴィゴツキー的な私的発話はもはや生じないということではないだろう。実際、John-Steiner (1992) が取り扱っているようなクラフト・ワークなどの実践的活動では、状況的な問題解決の発話が生じる。コンピュータで慣れない作業を行っている時にも、私的発話は生じるだろう (John-Steiner, 1992)。したがって、今回捉えた独り言とは、典型的には、普段日常生活の中で1人で部屋にいるような時に生じる独り言であると考えられる。むしろ、前者のような問題解決の発話については、内面化されるかどうかという点で、今回は内面化能力尺度のほうが捉えていたのではないかと考えられる。

以上のように、本研究では、ある程度、典型的な大人の独り言の特徴が浮き彫りにできたのではないだろうか。しかしながら、独り言傾向と内面化能力は相関が高いことから、実際ではそれらはあまり明確に区別できるようなものなのではないのかもしれない。いずれにせよ、少なくとも大人では、従来の研究が考えていたように単純に問題解決だけというのではなく、そこに感情も絡んでくるような複雑なものであることは間違いない。

ただし、本研究では、独り言の質的なものについて言及するには限界がある。それ故、今後は、今回の結果を基礎資料として、実際にはどのような発話がなされているのかを探るような研究を進めていく必要があるだろう。ただし、本研究で示唆されたように、独り言の生起には、その人の普段の活動が影響していることが考えられるので、それを踏まえて検討をしていくことが重要といえる。

引用文献

- 天野 清 1981 思考と言語行為—特にヴィゴツキー学派と内言研究を中心に サイコロジー, **11**, 38-43.
- Berk, L.E. 1986 Relationship of elementary school children's private speech to behavioral accompaniment to task, attention, and task performance. *Developmental Psychology*, **22**, 671-680.
- Berk, L.E. 1992 Children's private speech: An overview of theory and the status research. In R.M. Diaz, & L.E.Berk (Eds.), *Private speech: From social*

- interaction to self-regulation*. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.17-53.
- Berk, L.E., & Garvin, R.A. 1984 Development of private speech among low-income Appalachian children. *Developmental Psychology*, **20**, 271-286.
- Diaz, R.M. 1986 Issues in the empirical study of private speech: A response to Frawley and Lantolf's commentary. *Developmental Psychology*, **22**, 709-711.
- Frauenglass, M.H., & Diaz, R.M. 1985 Self-regulatory functions of children's private speech: A critical analysis of recent challenges to Vygotsky's theory. *Developmental Psychology*, **21**, 357-364.
- Fry, P.S. 1992 Assessment of private and inner speech of older adults in relation to depression. In R.M.Diaz, & L.E.Berk (Eds.), *Private speech: From social interaction to self-regulation*. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.267-284.
- 藤岡久美子 1995 絵カード分類課題遂行中の幼児の独り言の分析 日本発達心理学会第6会大会, 39.
- 今川民雄 1981 Ambiguity Tolerance Scaleの構成(1)—項目分析と信頼性について— 北海道教育大学紀要第一部C教育科学編, **32**, 79-93.
- 岩男征樹 1993 大人における独り言の分類 日本心理学会第57回大会発表論文集, 329.
- 岩男征樹 1994 ヴィゴツキーの思想を探る(1)—「発達」について 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 1.
- 岩男征樹 1995 発話傾向についての自己報告に基づく個人の分類 教育心理学研究, **43**, 220-227.
- 岩男征樹 1996 ヴィゴツキーの思想を探る(2)—「発達の最近接領域」について 日本教育心理学会第38回総会発表論文集, 44.
- Iwao, S. 1996 The development of the mind as psychological systems. *Journal of Russian and East European Psychology*, **34**, 6-15.
- 岩男征樹 1997 自己サンプリング法を用いた大人の独り言の分析 日本社会心理学会第38回大会発表論文集, 98-99.
- 岩男征樹・堀洋道 1996 発話傾向尺度の作成及び信頼性と妥当性の検討—社会的発話傾向に注目して— 筑波大学心理学研究, **18**, 147-155.
- 岩田紀 1987 日本人大学生におけるプライバシー志向性と人格特性との関係 社会心理学研究, **3**, 11-16.
- John-Steiner, V. 1992 Private speech among adults.

- In R.M.Diaz, & L.E.Berk (Eds.), *Private speech: From social interaction to self-regulation*. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.285-296.
- Kohlberg, L., Yaeger, J., & Hjerthom, E. 1968 Private speech: Four studies and a review of theories. *Child Development*, **39**, 691-736.
- 楠見 孝 1991 '心の理論'としてのメタ記憶の構造:自由記述,記憶のメタファに基づく検討. 日本教育心理学会第33回総会発表論文集, 705-706.
- 久世敏雄・続有恒・蔭山英順ほか 1972a 両親の愛情の認知と困った場面における自己開放性についての一研究 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **19**, 51-63.
- 久世敏雄・続有恒・蔭山英順ほか 1972b 困った場面における親の信頼感についての一研究 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **19**, 199-208.
- 久世敏雄・蔭山英順 1973 「困った場面」における自己開放性についての一研究 青年心理学研究会(代表 依田新編) わが国における青年心理学の発展 金子書房 Pp.151-170.
- 久世敏雄・蔭山英順ほか 1973 困った場面における両親への信頼感と自己開放性についての一研究 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **20**, 39-49.
- レオンチェフ, A.N. 西村学・黒田直美(訳) 1975/1980 活動と意識と人格 明治図書 (Леонтьев, А Н 1975 *Деятельность Сознание, Личность*. Москва: Политиздат.)
- 宮本美沙子・国枝加代子・山梨益代・東洋 1965 子どものひとりごと 教育心理学研究, **13**, 14-20.
- 坂野登・天野清 1982 言語心理学 現代心理双書 第3巻 新読書社
- 瓜生淑子 1980 ヴィゴツキー以降の内言研究が示したものと今後の発達の研究における課題 京都大学教育学部紀要, **24**, 270-280.
- Vygotsky, L.S. 1930 Tool and symbol in child development. In M.Cole, V. John-Steiner, S. Scribner, & E. Souberman (Eds.), *Mind in society*, 1978 Cambridge, MA: Harvard University Press. Pp.19-30.
- ヴィゴツキー, L.S. 柴田義松(訳) 1930-31/1970 精神発達の理論 明治図書 (Выготский, Л С. 1930-31 История Развития высших психических функций. *Развитие высших психических функций* 1960 Москва: Издательство Академии Педагогических Наук.)
- ヴィゴツキー, L.S. 柴田義松(訳) 1934/1962 思考と言語 明治図書 (Выготский, Л С. 1934 Мышление и речь: Психологический исследования. *Избранные психологические исследования* 1956 Москва: Издательство АПН РСФСР.)
- Wertsch, J.V. 1979 The regulation of human action and the given-new organization of private speech. In G.Zivin (Ed.), *The development of self-regulation through private speech*. New York: Wiley. Pp. 79-98.
- 山田尚子 1990 CFQ(Cognitive Failures Questionnaire)に関する検討(1) 甲南女子大学大学院心理学年報, **9**, 1-20.
- 柳井晴夫・柏木繁男・国生理枝子 1987 プロマックス回転法による新性格検査の作成について(I) 心理学研究, **58**, 158-165.

謝 辞

本研究は、調査の実施に際して、山形大学教育学部出口毅先生、常磐大学人間科学部片山美由紀先生のご協力をいただきました。ここに記して感謝いたします。

—1997. 9. 30 受稿—